

## 現代フランス語の [ka] と [ga] における 軟口蓋破裂音の口蓋化について

伊藤 玲子

### La palatalisation des occlusives vélaires de [ka] et [ga] en français contemporain

ITO Reiko

#### Résumé

Cette étude a pour objet de voir quels seraient les facteurs qui engendrent la palatalisation des occlusives vélaires [k] et [g] devant la voyelle [a] en français contemporain en utilisant les différents paramètres sociolinguistiques suivants : lieu, genre et génération. Nous allons aussi observer s'il existe des différences parmi les mots choisis pour cette étude.

Ce phénomène a été examiné sur les corpus de français parlé enregistrés dans trois villes en France : Aix-en-Provence, Bordeaux et Orléans. Nous avons d'abord choisi les 6 mots suivants pour notre analyse compte tenu de leur fréquence dans les corpus : *café*, *quart*, *quartier*, *gare*, *magasin* et *gâteau*. Ensuite, nous avons écouté et catégorisé les occlusives de ces mots en deux groupes « palatalisée / non-palatalisée ».

D'après l'analyse, nous pouvons remarquer que la génération 15-25 ans palatalisent dans les trois villes. De plus, la fréquence de ce phénomène varie selon des lieux et des mots. Nous avons aussi constaté que la jeune génération a tendance à palataliser plus que la génération 55-65 ans à Orléans. Le mot « gâteau » n'est pas beaucoup palatalisé à Orléans, notamment chez les personnes plus âgées. Cela montre qu'il y a une différence entre les mots selon les lieux et les générations.

Enfin, nous pouvons aussi remarquer une certaine progression du phénomène au cours du 20<sup>ème</sup> siècle en comparant nos résultats avec l'Atlas Linguistique de la France.



## 目次

1. はじめに
2. 口蓋化とは
  - 2.1. 定義
  - 2.2. 音韻論からみた口蓋化
  - 2.2. フランス語の歴史的な口蓋化
3. 先行研究
  - 3.1. 音声学
  - 3.2. 方言学
  - 3.3. 社会言語学
  - 3.4. 話し言葉
4. 本研究の目的
5. 方法
  - 5.1. コーパス

- 5.2. 調査対象語彙
- 5.3. データ
6. 社会言語学的分析
  - 6.1. 場所
  - 6.2. 性別
  - 6.3. 世代 (オルレアン)
7. 単語による考察
  - 7.1. 直前・直後の影響
  - 7.2. gâteau
  - 7.3. 20 世紀初頭の café と gâteau との比較
8. おわりに

## 参考文献

## 1. はじめに

現代フランス語において、軟口蓋破裂音 [k] と [g] の口蓋化は広く見られる現象である。

例えば、café (コーヒー、あるいは喫茶店) という単語を [kafe] と発音するとき [k] は口蓋化していないが、一方で [kʰafe] と発音するとき [k] は口蓋化している。

## 2. 口蓋化とは

## 2.1. 定義

Catford (2001:129-136) は口蓋化を以下のように定義している。「2つの異なる場所で同時に起こる調音を同時調音と呼ぶ。(中略) 同時調音には2つのタイプがある：(i) 等位調音あるいは二重調音と、(ii) 副次調音だ。(中略) 同時調音の2番目のタイプは、2つの同等でない主要調音と副次調音が同時に進行しているものである。(中略) 副次調音の主なタイプは唇音化、硬口蓋音化、軟口蓋音化、咽頭音化である。(中略) 硬口蓋音化は主要調音の音声記号の横に上付きの [̟] を付けることにより書き表される。硬口蓋音化した音を発音するには、主要調音を行いながら、(およそ [i] と同じ) 舌背硬口蓋間調音の構え<sup>i</sup>をとらなければ

ばならない。(中略) 舌背軟口蓋音 [k] の硬口蓋化は、英語の key [kʰi:] のように、前部舌背を上昇させるだけでなく、舌と軟口蓋の接触部分の前方端を少し前方に変化させるのである。」

またフランス語における口蓋化について、Fagyal et al. (2006 :42) は次のように説明する。「フランス語の軟口蓋子音 /k/ と /g/ が後舌母音に後続されるとき、それらは「軟口蓋音」である。つまり舌の根元は次の母音の調音の後方向に引かれる。しかし /k/ と /g/ が前舌母音に後続されるときには舌面が母音の調音である硬口蓋の前方方向に上昇し、その結果として口蓋化が起こり、つまり硬口蓋の方向に子音と母音の調音のわずかな推移が起こる。」

この現象の呼び方であるが、硬口蓋化と呼ぶ文献もあれば口蓋化とするものもある。本論文では口蓋化で統一することとする。

## 2.2. 音韻論からみた口蓋化

フランス語では [k] と [kʰ] は弁別的価値がない。つまり先ほど挙げた café の例では、[kafe] でも [kʰafe] でもどちらも café と認識される。

## 2.3. フランス語の歴史上起きた口蓋化

フランス語の歴史で口蓋化が起きたことは良く知られている。Zink (1986 : 91-114) によれば、2-3 世紀以降に軟口蓋子音 *k, g* は、*a, e, i, t, s, l, r, y* によって前方に引っ張られ、この音声変化は 13 世紀ごろには完了した。

本研究は歴史的な口蓋化と直接的な関係はなく、よって詳しい説明は行わない。しかし歴史的な口蓋化プロセスが進展する間、あるいはその完了後にフランス語に借用された語彙に対して新たに口蓋化が始まった。それが現代フランス語で行われている *[k]* と *[g]* の口蓋化と関係がある。Duchet (1992) はこれを次のように説明している。*[a]* の前で */k/* は「古フランス語で *[tʃ]* になり、現代フランス語で *[ʃ]* になっている。例えば、後期ラテン語 *cappa* > フランス語 *chape* *[ʃap]* (長袍祭服) と変化した。(中略) ところが、たとえば借用の働きにより、語頭に */k + a/* を持つ語が少しずつ再び現れるようになった。フランス語はイタリア語から *cappa* < マント > という語を *cape* (袖なしマント) の形で借用した。そこでこの新語はすぐにそれ以前からあった *chape* と最小対を形成することになり、結局、古フランス語 *chape* の *[tʃ]* がこの文脈で音韻化されたのである。(中略) *[a]* の前では新しい対立 */k/* ~ */tʃ/* が生まれ、その結果、ある種の語彙的変革が可能となった (*car* (長距離バス) ~ *char* (荷車)、*camp* (野営地) ~ *champ* (畑)、*casser* (割る) ~ *chasser* (狩りをする) 等)。たいていの場合、このように対立する 2 つの語は、もとをただせば同じ語であるが、比較的にラテン語から借用された後者の語がもとの *[k]* の音を保持している。たとえば *charte* (古文書) ~ *carte* (証明書)、*champagne* (シャンパン) ~ *campagne* (田舎) 等をあげることができる [後者が借用語で *[k]* を維持している]」(1992 : 105-107)。

## 3. 先行研究

現代フランス語における口蓋化は、音声学、方言学、

社会言語学、話し言葉などの様々な観点から言及されている。以下ではそれぞれの先行研究を概観する。

### 3.1. 音声学

Carton (2001) によると、前舌母音の前の口蓋化は 17 世紀の民衆の話し言葉で見られた。その後 19-20 世紀になると上品でない発音で *[k + e, i, y]* の湿音<sup>6</sup>が認められ、民衆の話すフランス語ではその現象は増加している。この論文は、*[k]* に後続する母音 *[e, i, y]* についてのみ述べているが、その他の母音については何も言及していない。

Faynal et al. (2006 : 42) は、パリのフランス語の下層階級のバリエーションの中に、調音点を変更したかのように思われるほどに口蓋化した */k/* や */g/* が聞こえることがあると書いている。しかし、口蓋化については一般的な記述で終わっている。

Berns (2013) は、第 2 フォルマント (F2) の差<sup>7</sup>を計測して、同時調音の度合いを社会言語学的観点で考察している。Berns (2013) は口蓋化の先行研究について以下のように指摘している。軟口蓋音の前舌化が現代フランス語の特徴であると言われているが、データの裏づけがないために明確な特徴はいまだにはっきりしておらず、口蓋化は言語学的な状況にのみ依存しているのか、発話者の社会言語的なバックグラウンドにも左右されるのか明らかになっていない (Berns 2013 : 14)。

Berns (2013) の研究を紹介する前に、先にフォルマント周波数と F2 について説明しよう。Catford, J.C. (2001 : 201-207) によれば、「ある母音に対する舌と唇の形状は、口と咽頭から共鳴器のシステムを作り出し、そのシステムはその特定の母音に特徴的な特定のフォルマント周波数を取り出す。すべて基本周波数よりも高い周波数を持ついくつかのフォルマントが存在する可能性があり、それらを周波数が上がっていく順に第 1 フォルマント、第 2 フォルマント、第 3 フォルマント、第 4 フォルマント、などのように番号を付けるが、普通は F1、F2、F3、F4、などのように省略し

て表す。(中略) F2 は後舌母音では最も低い値となり、前舌になればなるほど値が大きくなる」。

Berns (2013) によれば、F2 の周波数は子音の調音点の特定のためのパラメータになる。locus 周波数は特定の破裂音の周波数であるが、それは閉鎖が起こった位置に出来て、その場所から母音の開始によって F2 周波数は始まるように見える。前舌母音 i, e, ε そして中舌母音 a には高い locus 周波数が現れるが、後舌母音 ɔ, o, u では locus 周波数はすぐに壊れる。つまり全ての母音に対して同じ locus 周波数は現れない。

この研究は、複数の都市で読み上げられた音声データを使用した。そして軟口蓋音 +[i-j], [y], [e-ε], [u], [o-ɔ], a<sup>1</sup> それぞれの F2 の差を比較したところ、軟口蓋音 + a が F2 の差が一番大きく、つまり同時調音が弱いことがわかった。また都市による F2 の差の違いは見られなかったが、男性よりも女性の方が F2 の差が大きく、年齢が高いグループ (55 歳以上) の方が若者グループ (30 歳以下) よりも F2 の差が大きかった (Berns 2013 : 21)。

Berns (2013 : 21) 曰く、女性は同時調音を最低限にしようとする傾向があるが、それは Labov (2001 : 261-293) が言うように、女性は規範に従って調音したいと望むからである。

また若者はシニア世代よりも同時調音の度合いが大きいことについては、Berns (2013 : 21) は、若者が年齢を重ねて仕事上の話し方に気をつけ始めると同時調音しなくなるのかもしれない、あるいは若者は習得した言語能力として歳を重ねてもずっとこの特徴を持ち続けるのかもしれない、という見解を述べている (2013 : 21)。

そして軟口蓋音の前舌化は母音の前舌の度合いに決定的に依存するとして、/a/ の前舌化について以下のように述べている。Walter (1988 : 256) が「patte の a は非常に前舌化されていて [ε] に近く、pâte の a の調音点は後ろにあり [ɔ] に近かった」と書いているように、20 世紀中頃までは前舌の /a/ と後舌の /a/ は明らかに違う発音だったが、この音の対立は徐々に無くなった。また歴史上起こった a の前の軟口蓋音の口蓋

化プロセスも、母音の調音点の前寄り化によって引き起こされた (2013 : 21-22)。

Berns (2013) が音響音声学的ソフトウェアを用いて音声データの口蓋化を解析し、その解析結果を社会言語学的に分析したことは意義深い。しかし扱った音声データは、テキストと単語リストの読み上げであり、自由会話の結果とは異なる可能性があることから、自由会話に基づいた検証が望まれる。

### 3.2. 方言学

1970 年代にフランスの各地方で住民の調査を行い、その音声特徴をまとめた Carton et al. (1983) は、地方に加えて、標準化されたフランス語 (le français standardisé)、パリの標準化された訛り、パリの民衆の訛り、ブルジョワの上流階級や知識人の言葉の特徴についても言及している。口蓋化は、ピカルディ北部、標準化されたフランス語、パリの民衆の訛りで見られると指摘している (Carton et al. 1983 : 23, 78, 84)。また標準化されたフランス語は地理的な制限がもはやないと述べている (Carton et al. 1983 : 93)。<sup>9</sup> この研究は 1970 年代のフランス全体を調査しており、当時の音声特徴を知る上で貴重な資料である。

### 3.3. 社会言語学

社会言語学的な研究において、都市の郊外に多く居住する労働者階級の住民たちは、特徴のある話し方をすると言われる。しかし Jamin (2005: 1-5) によると、社会言語学的研究は今までアメリカ英語とイギリス英語に焦点を当てたものがほとんどで、ヨーロッパのフランス語における口蓋化や破擦化についての社会言語学的研究は少なく、この現象についての研究のほとんどが歴史的なもの、あるいは量的に検証されていないものだった。

そこで Jamin (2005) はパリ郊外の 2 つの町 (La Courneuve と Fontenay-Sous-Bois)<sup>10</sup> で 1998 年に録音した音声サンプルをコーパスとして、歯音閉鎖音と軟口

蓋閉鎖音の口蓋化と破擦化などについて社会言語学的に分析を行った。破擦化を口蓋化プロセスの一部とみなして調査の対象とし、また出身によるバリエーションの特徴を観察するためにインフォーマントを出身別に3分類した(フランス本土、北アフリカ、その他)。音声データは3つのスタイル(単語リスト、リーディング、インタビュー)を用意し、「口蓋化を全くしていない閉鎖音」、「湿音から破擦音までの口蓋化された閉鎖音」に聴き分けた(Jamin 2005:120)。分析の結果、歯音と軟口蓋音の破擦化を含む口蓋化はパリ郊外の町で良く見られる現象で、小さい度合いの湿音から破擦化までのバリエーションがあることがわかった。社会言語学的観点での分析では、若者の方がシニア世代よりも口蓋化率が高く、両世代ともに男性の方が口蓋化率が高かった。また両世代とも北アフリカ出身、その他出身、フランス本土出身の順に口蓋化率が高く、特に破擦化は北アフリカ出身者のフランス語の特徴であるという結果が出た。そしてインタビュースタイルよりもリーディングスタイルの方が口蓋化率が低く、特に北アフリカ出身者で低かった。世代を比較すると、どの出身グループでも若者の方が口蓋化率が高いことから、口蓋化は進行中であるかもしれないし、安定しているのかもしれない、と指摘する(Jamin 2005:135)。

Jamin (2005) が、読み上げとインタビューにおける口蓋化・破擦化の量的調査を行い、性別・世代・出身をパラメータとして社会言語学的観点で分析したことは意義深い。しかし、出身の分類方法については疑問が残る。フランスはヨーロッパ各国、北アフリカ、その他の地域から移民を受け入れてきた経緯があり、現在のフランス人を、フランス本土、北アフリカ、その他出身である、と単純に3分類することが出来るとは思えないからである。

次に紹介する Hornsby & Jones (2013) は、都市郊外の話し言葉について以下のように述べている。パリ郊外や他の主要都市の郊外に住む下層階級の話者の話し言葉には、特徴的なバリエーションがみられるが、軟口蓋閉鎖音 /k/ と /g/ の口蓋化もそのバリエーションである。郊外のバリエーションは、現代のロンドンの

ように、労働者階級と移民グループの接触から生まれたようである。パリ郊外はパリから孤立していて、且つお互いに接触がなく、つまり郊外のバリエーションはそれぞれの場所で独立して現れた。それにも関わらず話し言葉の特徴が似ているのは、それぞれの住民の出身が似通っているためである(Hornsby & Jones 2013:104-105)。

Jamin (2005) と同様に、Hornsby & Jones (2013) は口蓋化現象と都市郊外の下層階級や移民社会との関係性を指摘しているが、それ以外の人々の口蓋化現象については述べていない。

### 3.4. 話し言葉

Gadet (1992:32-35) は口蓋化について、「民衆のフランス語では歯音や軟口蓋音が口蓋化する傾向があり、歯音や軟口蓋音が前舌母音に先立つときに、標準システムにない硬口蓋の子音の出現がある」と書いている。しかし、「民衆のフランス語」とは、どの地域の民衆のフランス語のことを指しているのか説明していない。

また Léon (1993:204) は、口蓋化はパリの民衆の訛りの特徴であると述べて、地域を明白に限定している。逆にそれ以外の人々については何も述べていない。

## 4. 本研究の目的

先行研究で見たように、現代フランス語における軟口蓋破裂音 [k] と [g] の口蓋化は頻繁に観察される現象である。しかしながら Jamin (2005:1-5) が言うように、この現象を量的に検証した社会言語学的な研究は少なく、その Jamin (2005) が行った量的な調査は、調査地をパリ郊外に限定して、歯閉鎖音と軟口蓋閉鎖音の口蓋化と破擦化を同じプロセスと見なして合計し、後続する母音別には観察していない。また Berns (2013) は軟口蓋破裂音に後続する母音別に口蓋化の特徴を観察して、社会言語学的な観点で分析したが、読み上げの音声データのみを扱い、自由会話は分析していない。



そこで本研究では、自由会話における「軟口蓋破裂音+特定の母音」の口蓋化について、場所、性別、世代をパラメータとして社会言語学的観点で分析する。また直前・直後の音の影響、そして語彙や音の歴史的な変化からも考察する。

## 5. 方法

### 5.1. コーパス

エクサンプロヴァンス、ボルドー、オルレアン の3都市ではほぼ同じ時期に録音された話し言葉を調査した。本来ならばフランス全土で検討すべきであるが、同じ時期に録音された同じ世代の自由会話という条件で、この3つのコーパスを選定した。

オルレアンはフランス北部のオイル語圏に属している。一方で、フランス南部のボルドーは大西洋側、エクスは地中海側に位置し、この2都市は400km余り離れているがどちらもオック語圏に属している。つまりこの3都市の選定によって、北部と南部の違いと、オック語圏内でも地域によって違いがあるかどうかを観察することが出来る。

エクサンプロヴァンス（以下、エクス）とボルドーは、東京外国語大学語学研究所が管理する「多言語話しことばコーパス（フランス語（エクス）」の2009年度に録音した部分と、「多言語話しことばコーパス（フランス語（ボルドー）」の2011年度に録音した部分を使用した。

エクスとボルドーでは、2-3人のインフォーマントによる約1時間の自由会話を録音している。会話の内容はヴァカンスの思い出、学生生活などであった。

またオルレアン大学がフランス国立科学研究所（CNRS）と文化省、サントル地域圏と提携して2007年から録音・編纂しているフランス語における最大規模の話し言葉コーパス ESLO2 (Serpellet et al. (2007)) がオンラインで無料公開されており<sup>iii</sup>、それをオルレアンの音声データとして使用した。録音内容は多岐にわたり、知り合い同士の会話、家族の食事時の会話、政治家や経済人と研究者の会話、被験者の丸一日の録

音、ラジオのニュース、パン屋の会話、子供への読み聞かせ、道順の質問などが用意されている。幼児から65歳以上のインフォーマントは、10歳ごとの年齢層で分類されている。

以下の表1では3つのコーパスの規模を表した。

表1 コーパスの規模

	エクス	ボルドー	オルレアン
録音時期	2010. 2-3	2013. 3	2017-
録音時間	約 35 時間	約 30 時間	約 400 時間
総語彙数	約 50 万語	約 50 万語	約 600 万語
総インフォーマント数	69 人	51 人	-
インフォーマントの年齢	10 代～20 代 が中心 (ほぼ大学生)	10 代～20 代 が中心 (大学生)	幼児～ 65 歳以上

表2は各コーパスが持っているインフォーマント情報である。本研究で使用したインフォーマント情報に網掛した。

表2 インフォーマント情報

	エクス	ボルドー	オルレアン
誕生した年	○	○	○
年 齢	○	○	○ (10 歳毎の年齢層に分類)
住んでいる町	○	○	△
現住所にきた年	-	-	△
誕生地	○	○	△
性 別	○	○	○
学年、職種	○	○	○
他の言語	○	○	○
両親の誕生地	○	○	-
最終学歴	-	-	○
既婚/未婚	-	-	○
家族情報 (性別、年齢)	-	-	○

○：情報がある

△：記入は任意（記入なしが多数あり）

-：情報なし

3つのコーパスは、15–25歳の若者世代の音声データを共通して持っていることから、この年齢層のデータを場所、性別をパラメータにして分析する。またオルレアンESLO2では、15–25歳の若者世代と55–65歳のシニア世代で世代比較を行うことにした。

## 5.2. 調査対象語彙

軟口蓋破裂音に後続する母音を1つに限定することにして、[k][g]+[a]、[k][g]+[ɛ]、[k][g]+[e]、[k][g]+[i]を持つ単語がコーパスでどの程度出現するのかを、コンコーダンサー「AntConc」<sup>viii</sup>を使用して調査した。その結果、[k][g]+[a]をもつ単語の出現数が一番高く、出現頻度が高いものが量的な調査にふさわしいため、本研究では軟口蓋破裂音[k]と[g]に後続する母音を[a]に絞って分析することにした。他の音環境については稿を改めて検討したい。

次に名詞に限定して、[k][g]+[a]を持つ単語の出現数を再びAntConcを使用して調べた。自由会話のコーパスでは特定の単語の出現数は限られ、極めて少ない場合は偏った分析になる恐れがある。そのため本調査では出現数が多い以下の6単語だけを対象にすることにした。

- [k]+[a] : café, quart, quartier
- [g]+[a] : gare, magasin, gâteau

## 5.3. データ

エクスとボルドーの音声データは、オーディオ編集ソフトウェア「Sound Forge Audio Studio」を使用して単語を含む文を切り出し、雑音が入り明瞭でない音声サンプルは除外した。

オルレアンについては、ESLO2のHPで6単語を発話した15–25歳と、55–65歳の音声を聴いた。

以下の表は、使用した音声データ数と、それを発話したインフォーマント数である。

表3 エクスの使用データ

	café	quart	quartier	gare	magasin	gâteau
音声データ数	30	31	33	37	17	20
インフォーマント数	16	21	10	15	11	7

表4 ボルドーの使用データ

	café	quart	quartier	gare	magasin	gâteau
音声データ数	16	40	5	13	9	5
インフォーマント数	13	20	4	7	6	4

表5 オルレアン（若者世代）の使用データ

	café	quart	quartier	gare	magasin	gâteau
音声データ数	3	35	289	19	62	22
インフォーマント数	2	16	62	10	22	9

表6 オルレアン（シニア世代）の使用データ

	café	quart	quartier	gare	magasin	gâteau
音声データ数	16	29	208	43	16	3
インフォーマント数	6	12	25	11	8	3

自由会話の音声を音響音声学的分析ソフトウェア「Praat」で分析し、フォルマントから口蓋化しているかどうかを判定することは難しいことから、本研究では耳で聴き分けて次のように3分類した。

- － 明らかに口蓋化している
- － 中間
- － 明らかに口蓋化していない

聴き分けの信頼性を担保するために、口蓋化評価の信頼性テスト（一致度テスト）を行った。2015年11月に筆者と他の2名（当時東京外国語大学大学院でフランス語を専攻していた博士前期課程2年の日本人大学院生）の合計3名が別々にエクスとボルドーのcaféとgareの音声データ全てを聴き、「明らかに口蓋化している」「中間」「明らかに口蓋化していない」に3分類し、3人の聴き分けについてCronbachの信頼性分

析を行った。その結果、Cronbach の  $\alpha$  係数は、

- エクス café  $\alpha=.87$ 、
- エクス gare  $\alpha=.80$ 、
- ボルドー café  $\alpha=.88$ 、

と信頼度が十分に高い数値が得られた。またボルドーの gare は 3 名のうち 2 名が全く同じ聴き分けをしたことから、信頼性を計算するまでもないという結果が出た。

これを受けて、本研究では筆者の聴き分け判断によって分析を進めた。

以上のように音声データを 3 分類したが、口蓋化にはその程度に度合いがあることから (Jamin 2005: 120)、最終的に「明らかに口蓋化している」と「中間」を合わせて「口蓋化している」とし、「明らかに口蓋化していない」を「口蓋化していない」とした。

最終的に分析で使用したのは、発話したインフォーマント数である。なぜなら、自由会話の中で同じインフォーマントが調査対象の単語を連呼する場合もあり、音声データ数で頻度を出すと特定の個人の特徴に偏ってしまう可能性があるからである。よって、発話した調査対象単語を全て口蓋化している人を「口蓋化するインフォーマント」、口蓋化したりしなかったりする人を「揺れるインフォーマント」、全て口蓋化していない人を「非口蓋化インフォーマント」と呼ぶことにして、その人数を集計し、それらの割合 (%) を出して分析に使用した。

## 6. 社会言語学的分析 (場所、性別、世代)

この章では場所、性別、世代をパラメータにした社会言語学的分析の結果を説明する。

最初に全体の分析、次に単語による分析を行う。発話した人数が非常に少ない単語の考察には、特に注意が必要である。人数が少なければ、1 人が担う割合が大きくなるからである。しかしながら、何らかの傾向を見ることは可能であると考えて、人数が少ない場合は、口蓋化率の数値に固執し過ぎないように考慮しつつ、考察を行うこととする。

### 6.1. 場所

まず、若者の場所による違いを観察する。以下の表は、各都市の口蓋化インフォーマント、揺れるインフォーマント、非口蓋化インフォーマントの人数とそれぞれの割合をあらわしている。

表 7 3 都市における口蓋化人数と割合

	ボルドー		エクス		オルレアン	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	33	94	29	74	55	57
揺れる	2	6	9	23	29	30
非口蓋化	0	0	1	3	13	13

表 7 から、2010 年頃はこの 3 都市で [a] の前の軟口蓋破裂音の口蓋化はかなり行われていることがわかった。また場所によって口蓋化率に違いが見られた。ボルドーはほとんど口蓋化していた。エクスは口蓋化率がボルドーより低く 74% で、揺れるインフォーマントが 23%、非口蓋化率は 3% 見られた。オルレアンは一番口蓋化率が低く 57%、揺れるインフォーマントが 30% 観察され、一方で非口蓋化率は一番高く 13% であった。

次に単語別に観察してみよう。

表 8 ボルドーにおける単語 ([k] + [a]) の口蓋化人数と割合

	café		quart		quartier	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	11	85	22	100	4	100
揺れる	2	15	0	0	0	0
非口蓋化	0	0	0	0	0	0

表 9 ボルドーにおける単語 ([g] + [a]) の口蓋化人数と割合

	gare		magasin		gâteau	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	7	100	6	100	4	100
揺れる	0	0	0	0	0	0
非口蓋化	0	0	0	0	0	0



表8、表9を見ると、ボルドーでは唯一 café で揺れるインフォーマントがいたが（2人、15%）、他の5単語は100%口蓋化していた。逆に言えば、6単語全てで非口蓋化インフォーマントは0%であった。つまりボルドーでは6単語でほとんど口蓋化が行われていたことがわかった。

表10 エクスにおける単語 [k] + [a] の口蓋化人数と割合

	café		quart		quartier	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	13	76	21	100	8	89
揺れる	1	6	0	0	0	0
非口蓋化	3	18	0	0	1	11

表11 エクスにおける単語 [g] + [a] の口蓋化人数と割合

	gare		magasin		gâteau	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	13	81	11	92	4	57
揺れる	2	13	0	0	3	43
非口蓋化	1	6	1	8	0	0

表10と表11を見ると、エクスではほとんどの単語で良く口蓋化されていた。しかし gâteau を常に非口蓋化するインフォーマントは0人だったものの、口蓋化率は57%で他の単語より低く、揺れるインフォーマントが43%と他の単語に比べてかなり高かった。このように、gâteau は他の5単語よりも口蓋化しにくく、揺れる傾向も強いことがわかった。

表12 オルレアンの〈若者世代〉における単語 [k] + [a] の口蓋化人数と割合

	café		quart		quartier	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	2	100	15	94	43	69
揺れる	0	0	1	6	15	24
非口蓋化	0	0	0	0	4	6

表13 オルレアンの〈若者世代〉における単語 [g] + [a] の口蓋化人数と割合

	gare		magasin		gâteau	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	9	90	7	32	6	67
揺れる	0	0	5	23	1	11
非口蓋化	1	10	10	45	2	22

表12と表13では、オルレアンの若者世代は quartier、magasin、gâteau で口蓋化インフォーマントの割合が低い傾向があり（それぞれ69%、32%、67%）、また magasin と gâteau は非口蓋化インフォーマントの割合が高かった（それぞれ45%、22%）。また quartier と magasin は揺れる傾向が強かった。

以上のように、ボルドーとエクスは、オルレアンと比べて非口蓋化率が低く、口蓋化率が高い傾向が見られた。つまりボルドーとエクス（フランス南部）と、オルレアン（フランス北部）では、口蓋化傾向が分かれた。また場所によって口蓋化し易い、あるいは口蓋化しにくい単語があるようだ。

## 6.2. 性別

次に各都市の若者の性別による違いを観察する。

男女別に集計すると各単語の発話者が非常に少ないため、単語での比較は行わない。

表14 ボルドーで口蓋化する人数と割合の男女比較

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
口蓋化	11	100	22	92
揺れる	0	0	2	8
非口蓋化	0	0	0	0

表14を見てわかるように、ボルドーでは男女ともに概ね口蓋化していた。

表 15 エクスで口蓋化する人数と割合の男女比較

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
口蓋化	11	55	23	82
揺れる	4	36	5	18
非口蓋化	1	9	0	0

表 16 オルレアンンの若者世代で口蓋化する人数と割合の男女比較

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
口蓋化	11	48	44	64
揺れる	8	35	21	30
非口蓋化	4	17	4	6

一方で、表 15 と表 16 を見ると、エクスとオルレアンでは女性の方が口蓋化インフォーマントの割合が高く、また非口蓋化インフォーマントの割合が低かったことから、この 2 都市の若者世代では、男性よりも女性の方が前舌母音 [a] の前の軟口蓋破裂音 [k] と [g] を口蓋化する傾向があるように見える。

口蓋化と破擦化を合計して分析した Jamin (2005) や、リーディングタスクを分析した Berns (2013) は、女性よりも男性の方が口蓋化すると指摘している。本研究はこの 2 つの研究とは調査対象が異なっていることから、結果に違いが出るのは十分に理解できる。しかし本研究では単語による比較は行わず、調査が十分だったとは言えないため、性別の分析について結論を述べるのは控えたい。

### 6.3. 世代 (オルレアン)

表 17 オルレアンにおける若者世代とシニア世代の口蓋化する人数と割合の比較

	若者世代		シニア世代	
	人数	%	人数	%
口蓋化	55	57	17	53
揺れる	29	30	12	38
非口蓋化	13	13	3	9

表 17 を見ると、オルレアンの両世代の口蓋化・非口蓋化傾向は似ており、世代の違いは無いように見える。

次にシニア世代の単語の特徴を見てみよう。以下の表 18、表 19 では、gâteau の非口蓋化インフォーマントが非常に多いことが際立っている。café、quartier、magasin も口蓋化インフォーマントが低い傾向がある。また café と magasin は非口蓋化インフォーマントの割合が比較的高く、quartier は揺れるインフォーマントの割合が高い。

6 章の冒頭でも述べたように、調査対象の単語を発話した人数が少ない場合、分析には注意が必要であり、表 19 の gâteau が 100% 非口蓋化 (発話者合計 3 人) という結果からオルレアンのシニア世代は全員が非口蓋化すると解釈することは危険であるものの、非口蓋化し易い傾向があると考えられる。

表 18 オルレアンにおける〈シニア世代〉の単語 ([k]+[a]) の口蓋化する人数と割合

	café		quart		quartier	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	4	67	10	83	14	56
揺れる	0	0	1	8	8	32
非口蓋化	2	33	1	8	3	12

表 19 オルレアンにおける〈シニア世代〉の単語 ([g]+[a]) の口蓋化する人数と割合

	gare		magasin		gâteau	
	人数	%	人数	%	人数	%
口蓋化	11	100	5	63	0	0
揺れる	0	0	1	13	0	0
非口蓋化	0	0	2	25	3	100

先に説明したオルレアンの若者世代 (表 12、表 13) を、上のシニア世代 (表 18、表 19) と比較する。単語別に比べると、全体を合計した結果 (表 17) では見えてこなかった世代の違いが現れてくる。

gare と magasin はシニア世代の方が口蓋化インフォーマントの割合が若干高く、非口蓋化インフォーマントの割合が低い傾向があるが、反対に他の 4 単語

(café, quart, quartier, gâteau) はシニア世代の方が口蓋化インフォーマントの割合が低く、非口蓋化インフォーマントの割合が高い傾向が見られた。

シニア世代の方が口蓋化し易い単語があるものの、非口蓋化インフォーマントに着目するとシニア世代の方が非口蓋化し易く、口蓋化インフォーマントを見ると若者世代の方が口蓋化し易い傾向がある。揺れるインフォーマントの割合は両世代で類似している。

若者の方がシニア世代よりも口蓋化するという分析結果は、Jamin (2005)、Gadet (1992)、Léon (1993)、Hornsby & Jones (2013) の見解と一致した。Jamin (2005: 135) や Gadet (2003: 54-57) は、バリエーションには変化に至らない安定的なものと変化が進行中の2つの場合がある、と述べている。つまり本研究で観察した [a] に先行する軟口蓋破裂音の口蓋化は、安定したものかもしれないし、変化が進行中である可能性もある。通時的変化の可能性については、7.3. で議論を試みる。

興味深いことに、オルレアンの両世代ともに、gâteau の非口蓋化インフォーマントの割合が高い傾向があった。gâteau については以降の 7.2. で改めて考察を行いたい。

## 7. 単語による考察

### 7.1. 直前・直後の音の影響

同じ単語でも口蓋化したり、非口蓋化したり、揺れるインフォーマントがいる。軟口蓋音 + [a] の直前・直後の音が口蓋化に影響を及ぼしている可能性があると考え、インフォーマントの発話で検証した。ここでは規範的な発音は小学館ロベール仏和大辞典を参照することにする。

初めに軟口蓋音 + [a] が語中にある magasin を観察すると、[ga] の直前は前寄りの [ma]、直後も前寄りの [zɛ] であるが、軟口蓋音は口蓋化したりしなかったり一定していなかったことから、「口蓋化するかしないかは直前・直後の音に依るものではない」という仮説をたててみた。

以下では同じインフォーマントの発話が直前・直後の音に影響されるのかどうかを観察し、先の仮説が正しいかどうかを検証する。

まず、エクスインフォーマント OG は次のように発話した。

(1) La cigarette, ouai et un bon café (非口蓋化)

(2) Ah oui avec un petit café (口蓋化)

(1) では軟口蓋破裂音 [k] の直前が後舌の鼻母音 [ø] で、[k] は非口蓋化であった。また (2) は直前が前舌母音 [i] で、[k] は口蓋化していた。このインフォーマントの例では直前の調音点が口蓋化に影響しているように見える。

次にエクスインフォーマント SB の発話を見てみよう。

(3) c'est bon et puis e allez boire un café (非口蓋化) à la lieu de vous draguer comme ça mutuellement allez boire un café (非口蓋化) borde !

(3) では « un café » が2回発話されていたが、[k] の直前は前舌の鼻母音で、両方とも非口蓋化だった。この場合は、直前の調音点が口蓋化に影響しているとは言えない。

またエクスインフォーマント GP は gare を次のように発話した。

(4) on était à la gare (非口蓋化)

(5) et la gare de chez moi (口蓋化)

(4) と (5) では、[g] の直前は [la] で調音点が前寄りであるが、口蓋化と非口蓋化の両方が実現されている。この場合も、直前の調音点が常に口蓋化に影響しているというわけではなかった。

次は直前と直後を観察できる例である。エクスインフォーマント SB は同じ名詞句 « la gare routière » を以下のように発話していた。

(6) tu vois la gare routièr (口蓋化)

(7) c'est entre les Allées Provencales et la gare routièr  
(非口蓋化)

(6) と (7) では、[g] の直前は (4)(5) と同様に調音点が前方の [la] であり、直後は調音点が後方の [ʁu] であるが、口蓋化と非口蓋化の両方が行われていた。

以上の例を見る限り、直前あるいは直後の音の調音点が前寄りでも常に口蓋化しているわけではなく、後寄りでも常に非口蓋化しているわけでもなかった。

検証には残る 4 単語も同様に調査すべきではあるが、「口蓋化するかしなないかは、直前・直後の音に依るものではない」という仮説が真である可能性が高い。よって、揺れる理由はそれ以外にあると考える。

## 7.2. gâteau

6.1. と 6.3. で見たように、gâteau の口蓋化率が都市によって明らかに違うことに興味を覚え、gâteau という語彙について調べることにした。

小学館ロバール仏和大辞典によれば gâteau は、ゲルマン語 \*waχsam > wahs 蠟 > フランク語 wastil 食物 > 俗ラテン語 \*wastellum と変化した語彙である。また Trésor de la langue française (TLF)<sup>6</sup>によれば、1140 年に《aliment fait de pâte》(小麦粉に牛乳、卵などを練り合わせたこね粉でできた食べ物) という意味で gastels (複数形) が使われており、1170 年に gastiax (単数)、1541 年には avoir part au gasteau (利益の分け前にあずかるの意味で、現在は avoir part au gâteau である) の記述がある。その後 s の音も綴りも消失し、gâteau という綴りに変化した。

次に â について Bourciez, E. et J. (1967 : 9) は、「母音《A》は a と â によって表される。a の発音は少し舌を口蓋の方に持ち上げ、â は少し舌を口蓋帆の方に持ち上げる。その上、a は唇を広げ、â では円唇にする。これらの調音の違いによって、前舌の a を後舌の â と区別できる」と書いているが、このように綴り字 â は

後舌母音 [ɑ] を表していた。

また [ɑ] と [a] について Berns (2013 : 21-22) によると、20 世紀中頃まではフランス語の前舌母音 [a] と後舌母音 [ɑ] は対立していたが、その後 [ɑ] が前寄りになった。一方で、[ɑ] と [a] の地域的な違いについて Ricard (1994 : 185) は、フランス大革命以後の音韻論的变化として、南部では広い範囲で [a] に前舌化しており、現在では北部でもより若い世代は [ɑ] をより前寄りの [a] にするか、その中間で発音する傾向が強くなり、一方で北部の年配の世代は [ɑ] と [a] の対立を全体として良く守っている、と述べている。

本研究で、北部のオルレアンでは南部の 2 都市よりも非口蓋化する傾向が明らかに見られた。またオルレアンのシニア世代は、若者世代よりも非口蓋化する傾向があることを観察した。これらのことは、フランスの北部と南部で /a/ の調音位置の変化が異なっていることと、北部の年配者と若者の間で /a/ の調音位置の傾向に違いがあることが関係していると考えられる。ただインフォーマントが gâteau の â を前舌・後舌どちらで実現していたのかは、音響的な解析が困難だったために確認出来ていない。

## 7.3. 20世紀初頭の café と gâteau との比較

6.3. で、オルレアンでは若者世代よりもシニア世代の方が非口蓋化する傾向があることがわかったが、「若者世代の方が口蓋化率が高いということは口蓋化が進行中である可能性がある」という Jamin (2005 : 135) の指摘を確かめるべく、本研究の結果と 20 世紀初頭に編纂された言語地図 Atlas Linguistique de la France (ALF) との比較を試みた。

約 100 年前にエドモンが調査してジリエロンが編纂した ALF には、6 単語のうち café (« le café » として調査されている) と gâteau の言語地図が収録されていることから、エクス、ボルドー、オルレアンとその周辺のこの 2 単語の発音を調べると、3 都市とその周辺はもとより、フランスで全く口蓋化していなかった。唯一、地点 197 (ベルギー南部のナミュール辺り) で

« le café » の口蓋化が見られただけであった。つまり、[a] に先行する軟口蓋破裂音の口蓋化現象は 20 世紀中にフランスで進行したようだ。

本研究より 40 年前に調査された Carton et al. (1983) は、1970 年当時のガスコーニュ地方（ボルドー）、プロヴァンス地方（エクス）、トゥレーヌ地方（オルレアン）で口蓋化が行われていたとは述べていない。一方で、口蓋化は標準化されたフランス語の特徴であるとしている（Carton et al. 1980 : 78, 84）。また Léon (1993 : 204) は、口蓋化はパリの民衆の訛りの特徴であるとしている。

憶測の域を越えないが、つまり 1970 年～2010 年の 40 年間に、口蓋化は標準化されたフランス語、あるいはパリの訛りの普及とともに、ボルドー、エクス、オルレアンに広まったと考えられる。標準化されたフランス語とパリの民衆の訛りの関係は、ここでは議論しない。

揺れる現象は、口蓋化が進行中で不安定であることを表しているのかもしれない。

## 8. おわりに

本研究は出現数の問題から 6 単語に限定したが、より多くの単語で調査することが望ましい。ただ自由会話を対象にする限り、分析に耐えうる出現数を確保するためには、かなり大規模なコーパスが必要である。

先行研究で取り上げた Jamin (2005) や Hornsby & Jones (2013) は、口蓋化は郊外や移民の話し言葉の特徴だとしているが、本研究の調査によって、[a] に先

行する軟口蓋音破裂音の口蓋化は、ボルドー、エクス、オルレアンの大学生で広く行われていることがわかった。つまりこの口蓋化は郊外や移民に限った現象ではない。

場所による違いが見られ、ボルドーとエクスの 2 都市とオルレアンで口蓋化に異なる傾向が見られた。それぞれオック語とオイル語から何らかの影響がある可能性がある。

エクスとオルレアンでは、若い男性よりも若い女性の方が口蓋化する傾向がみられたが、単語による分析を行っていないため、ここで性別による比較の結論を導くのは尚早である。

gâteau は、フランスの北部と南部、また北部の若者と年配者で口蓋化傾向が異なっていた。これは、地域と世代で â の前舌化に違いがあったことと関係がありそうだ。

口蓋化が進行中である可能性を考えて、20 世紀初頭に編纂された言語地図を参照すると、café と gâteau の口蓋化の記述はなかった。つまり [a] に先行する軟口蓋破裂音の口蓋化は 20 世紀中に拡大した可能性がある。

また口蓋化するかしないかは、おそらく直前・直後の音に依らないことから、揺れる原因はそれ以外で検討する必要がある。推測であるが、口蓋化が進行中であることが揺れる原因なのかもしれない。

最後に、[a] に先行する [k] と [g] の口蓋化が、このまま安定して存在するのか、あるいは進行するのかは、長期的な観察によって明らかになるであろう。



## 注

- i 原著では「the tongue in a dorso-palatal position」
- ii フランス語音声学では口蓋音をこのように呼ぶことがある。
- iii Berns (2013) は F2 周波数を、閉鎖音と母音の接点と、母音の中心の 2 点で計測し、その差 (F2 の差) を出した。F2 の差が小さければ小さいほど、同時調音の度合いが大きい (Berns 2013 : 16)。
- iv 中舌母音を意味している。
- v Carton et al. (1983 : 93) は以下のように言っている。「田舎の年配者は地元から出ることがないために土地の訛りがあるが、都会に住む裕福な若者たちは標準化されたフランス語を獲得する機会があり、彼らをどの地方の人だと言うことは難しい。またラジオやテレビなどのマスメディアも標準化の重要な要因である。」
- vi それぞれパリの北と東およそ 7km に位置する、いわゆるバンリユー (banlieue) と呼ばれる郊外の町。
- vii <http://eslo.huma-num.fr/>
- viii <http://www.laurenceanthony.net/software.html>
- ix <http://www.atilf.fr/>

## 参考文献

- Bauvois, C. (2002), *Ni d'Eve ni d'Adam : étude sociolinguistique de douze variables du français*, Paris : L'Harmattan
- Berns, J. (2013), Velar variation in French, *Linguistics in the Netherlands 2013*, 13-27, Algemene Vereniging voor Taalwetenschap
- Bourciez, E. et J. (1967), *Phonétique française : étude historique*, Paris : Klincksieck
- Catford, J.C. (2001), *A practical introduction to phonetics*. 2nd ed, Oxford ; Tokyo : Oxford University Press (邦訳『実践音声学入門』 竹林滋、設楽優子、内田洋子訳 東京 : 大修館書店、2006 年)
- Carton et al. (1983), *Les accents des Français*, Paris, Hachette
- Carton, F. (2001), Quelques évolutions récentes dans la prononciation du français, *French accents : Phonological and sociolinguistic perspectives*, London : CiLT
- Dubois, J et al. (1973), *Dictionnaire de Linguistique*, Librairie Larousse, 『ラールス言語学用語辞典』 伊藤晃、他訳、(東京 : 大修館書店、1980 年)
- Duchet, J-L. (1992), *La phonologie* 《Collection QUE SAIS-JE ? n°1875》, 3<sup>ème</sup> édition. Presses Universitaires de France, 1992 『音韻論』 鳥居正文、川口裕司訳 (東京 : 白水社、1996 年)
- Fagyal et al. (2006), *French A Linguistic Introduction*, Cambridge
- Gadet, F. (1992), *Le français populaire*, Paris, Presses Universitaires de France
- Gadet, F. (2003), *La variation sociale en français*, Paris : Ophrys
- Hornsby, D & Jones, M.C. (2013), Exception française? Levelling, Exclusion, and Urban Social Structure in France, *Language and Social Structure in Urban France*, Jones, M.C. and Hornsby, D., Maney Publishing
- Jamin, M. (2005), Sociolinguistic Variation in the Paris Suburbs. PhD dissertation, University of Kent.
- Labov, W. (2001), *Principles of linguistic change. Volume II: Social factors*. Oxford : Blackwell.
- Léon, P. (1993), *Précis de Phonostylistique Parole et Expressivité*, Paris : Fernand Nathan
- Léonard, M. (1999), *Exercices de Phonétique Historique*, édition Nathan, Paris
- Martinet, A. (1971), *La prononciation du français contemporain : témoignages recueillis en 1941 dans un camp d'officiers prisonniers*, Genève : Droz
- Martinet, A. et Walter, H. (1973), *Dictionnaire de la Prononciation Française dans son Usage réel*, Paris : FRANCE-EXPANSION
- Ricard, P. (1974), *A History of French Language*, 2<sup>nd</sup> edition, The Academic Division of Unwin Hyman Ltd., London, 1989, 『フランス語史を学ぶ人のために』 伊藤忠夫、高橋秀雄訳 (京都 : 世界思想社、1996 年)
- Rosset, T. (1911), *Les origines de la prononciation moderne*. Paris:Colin.
- Schlieben-Lange, B. (1973), *Soziolinguistik : eine Einführung. 2., überarbeitete und erw. Aufl.*, 1978, 『【新版】社会言語学入門』 伊藤忠夫、高橋秀雄訳 (京都 : 世界思想社、1996 年)

- 学の方法』 原 聖、糟谷啓介、李 守訳、(東京：三元社、1996 年)
- Serpollet, N., Bergounioux, G., Chesneau, A. & Walter, R. (2007), A Large Reference Corpus for Spoken French:ESLO 1 and 2 and Its Variations, *Corpus Linguistics Conference 2007 at the University of Birmingham*, Article#64
- Walter, H. (1976), *La dynamique des phonèmes dans le lexique français contemporain*, Paris : France expansion
- Walter, H. (1977), *La phonologie du français*, Paris : Presses Universitaires de France
- Walter, H. (1988), *Le Français dans tous les sens*, Paris : Robert Laffont
- 古賀健太郎・秋廣尚恵・川口裕司 (2011)、「Aix 話し言葉コーパスプロジェクト」。『ふらんばー』 No. 37、東京外国語大学フランス語研究室、pp. 37-54
- 斎藤純男 (1997)『日本語音声学入門』、東京、三省堂。
- 真田信治 ほか (1992)『社会言語学』、東京、おうふう。
- 島岡 茂 (1974)『フランス語の歴史』、第4版、東京、大学書林、1994 年
- 小学館ロベール仏和大辞典編集委員会 (1988)『小学館 ロベール 仏和大辞典』、東京、小学館
- 田中晴美、田中由紀子 (1996)『社会言語学への招待 ―社会・文化・コミュニケーション―』、京都、ミネルヴァ。
- 服部四郎 (1951)『音声学』、東京、岩波書店。

